



日本の大学の研究活動のランキングと独立行政法人化

理論研究系分子基礎理論第一研究部門 岡本 祐 幸

我が国の国立大学の独立行政法人化が目前に迫っているが、それに伴って、大学及び大学共同利用機関の研究活動の順位付けがいろいろな形で行われていくことは必至であろう。これに関して、我が国の大学等の研究活動をランク付けする報告が学術月報の2000年3月号に発表された。¹⁾ 本小文では、この文献の内容について考察したい。

文献1では、米国ISI社(The Institute for Scientific Information²⁾)の引用統計データベースの中のNational Citation Report (for Japan) (NCR) という、所謂「日本の論文」(著者の少なくとも1人が日本の研究機関に所属するもの)のデータベースを調査対象としている。詳しく言えば、1981年1月から1997年6月までの16年半の間に、ISI社が厳選した「国際的に有力な雑誌」(数は数千に上り、原則的に英文誌)に発表された、853,323件の「日本の論文」のうち、文献種別がarticle、note、proceedingsである、737,039件の論文を調査対象としている(筆者は1995年4月に分子研に着任したので、このデータベースにはあまり関係なく、気楽にコメントできる立場にある)。実は、1992年に米国の有力雑誌*Science*が「日本の科学」と称する特別企画を設けて、³⁾ 同じISI社の1981年から1991年間のデータベースに基づいた、日本の研究機関のランキングを既に行っており、今回の調査¹⁾は、その延長上にあると言えるであろう(文献3を教えて下さった伊藤光男前所長に、この場を借りて感謝したい)。文献1では、これらの論文の所属機関を大学・企業・その他の3つのセクターに分類した。ここで、「大学セクター」は4年制大学、大学院大学、大学

共同利用機関、短期大学、高等専門学校、高等学校などの教育機関を含む(特に、532大学と17の大学共同利用機関が含まれている)。また、「その他セクター」は、基本的に文部省以外の官公セクターであり、国公立試験研究機関、特殊法人・財団法人の研究所や大学付属病院以外の病院、その他の公的団体等が含まれる。文献1では、特に大学セクターの論文589,472件の調査結果を中心に紹介している。

研究活動の順位付けは何を元にするかは、議論の余地があるが、上のデータベースに基づけば、研究機関毎の「論文数」と「引用度」(論文1報当たりの平均被引用回数)が考えられる。しかし、論文数は研究者の数が多ければ多くなるのは当然であり、また、意味のない論文を数多く書いても評価されないことを考えるとあまり良い指標とは言えない。一方、後者の引用度は、論文が他の研究者にどれくらい影響を与えたかを示すものであり、論文の質を示す(完璧とは言えないまでも、現在考えられる)最も客観的で厳密な指標と言うことができるであろう(完璧とは言えないというのは、例えばこの数字には同業者の数が考慮に入られていないという問題がある。同業者が多ければ引用度が高くなるのは当然である)。勿論、論文数が多いということも研究が活発に行われていることの一つの指標にはなり得る。すなわち、全論文数はその研究機関の研究者の数に依存するので、あまり意味がないが、研究者1人当たりの平均論文数(全論文数をその機関の(例えば、助手以上の)研究者の数で割ったもの)は重要な指標になる。しかし、文献1では全論文数と引用度だけが扱われていて、この量は考慮されていな

い。よって、ここでは、論文の引用度に基づいた、大学等の研究活動のランク付けに話を絞る。

文献1では理工系、生物・医学系、人文・社会系の3系26分野について、引用度の詳しい解析を行っているが、分子研に關係する化学と物理学の分野における結果を表1と表2にまとめた。ここでは、それぞれの分野において、論文数上位30機関の論文引用度をランク付けした(文献1の表4参照)。化学では分子研が圧倒的に全国第1位、物理学でも僅差で第1位であることが判明した。

なお、岡崎国立共同研究機構には分子科学研究所

の他に、基礎生物学研究所と生理学研究所という2つの研究所が存在するが、これらの2研究所が關係する生物学・生化学、神経科学、植物学・動物学の3分野においても、岡崎国立共同研究機構が、全国第1位にランクされている(文献1の表4参照)ことを付言したい。

それでは、なぜ、分子研がこれ程までに研究活動が活発なのかという問いに答えなければならない。これについては、前分子科学研究所長・前岡崎国立共同研究機構長の伊藤光男先生のご意見⁴⁾が大変参考になるので、それをここで引用させて頂く。「全

表1 日本の大学等の分野別論文引用度
分野：化学(1981-1997)

順位	大学等	論文引用度
1	岡崎国立共同研究機構	15.1
2	京都大学	10.6
3	東京大学	10.2
4	名古屋大学	10.0
5	大阪大学	9.4
6	東京工業大学	9.3
7	大阪市立大学	9.2
8	九州大学	8.6
8	東京薬科大学	8.6
10	東北大学	8.4
10	北海道大学	8.4
12	東京都立大学	8.2
13	広島大学	8.1
14	早稲田大学	7.7
15	慶応義塾大学	7.6
15	金沢大学	7.6

表2 日本の大学等の分野別論文引用度
分野：物理学(1981-1997)

順位	大学等	論文引用度
1	岡崎国立共同研究機構	11.1
2	東京大学	10.5
3	高エネルギー物理学研究所	9.8
4	京都大学	8.7
4	筑波大学	8.7
6	東北大学	8.0
7	東京工業大学	7.7
7	新潟大学	7.7
9	大阪大学	7.6
9	広島大学	7.6
9	神戸大学	7.6
12	名古屋大学	7.2
13	東京農工大学	6.9
14	九州大学	6.8
15	東京都立大学	6.7



ての教官、教授・助教授・助手の採用は公募で行っています。また助手から助教授、助教授から教授への内部昇進は実質的に禁止されています。(中略) おそらくここほど人事の流動性の高いところはないでしょう。日本一だと思います。これは、ここの研究環境が良い、また、大学と違って学生の教育に多くの時間をとられることなく、研究に没頭できるところにあると思います。ここのスタッフはプロモーションのためには外に出なくてはならない。外へ出るのは、日本の場合どうしても閉鎖的ですから、なかなかそう簡単ではありません。その競争に打ち勝って出ていかななくてはなりません。(中略) このような実績がよく知られているので、また全国から優秀な人が多数応募してくる。その中から一番よい者を選ぶということで循環がとてうまくいっているのです。」⁴⁾

大学の独立行政法人化に伴って、多くの大学が生き残りをかけて切磋琢磨する時代に突入しようとしているが、安易な任期制を導入して研究者の地位を不安定にするよりも(分子研では、助手には任期制も課しているのは確かだが)、むしろ、完全公募・内部昇進禁止という分子研の人事政策を採用することの方が研究活動を活発化するのに、効果が大きいと筆者は考えている。

ここまでは、分子研を宣伝する立場で書いてきた。しかし、一研究者の立場としては、私は引用度などに気を取られているようではスケールの大きな研究はできないと思っている。たまたま自分の書いた論文の引用度が高いのは名誉なことではあるが、引用度を上げようと思って研究の方向付けをし出したら

おしまいである。創造性の高い研究は、しばしば最初は人に無視されたりするものであるからである。引用度のように数値化されたものだけで研究者を評価することには大きな危険性も存在する。例えば、次のような有名な「伝説」がある。コーネル大学の物理学科に助教授として就職したK. Wilsonは終身雇用(tenure)の審査を受けるまでの数年間ほとんど論文を書けなかった。よって、数値化された評価は大変低いものであった。審査はもめにもめたが、最後にH. Betheが次のように言った(伝説であるので、実際の英語がどうであったかは定かでない)「But this man is DEEP」(深遠とでも訳すのであろうか)。この一言でWilsonにtenureが認められ、その数年後にノーベル賞につながる、繰り込み群の研究など、多くの創造性豊かな研究成果が生み出されたのであった。独立行政法人化により、評価評価と言い出したとき、評価する側がBetheのような眼力を持ち合わせない限り、Wilsonタイプの研究者が生き残る道が閉ざされて行くのを危惧する次第である。

参考文献

- 1) 根岸正光、孫媛、山下泰弘、西澤正巳、柿沼澄男、「我が国の大学の論文数と引用数　ISI引用統計データベースによる統計調査」、*学術月報* Vol. 53, No. 3, 258 (2000).
- 2) <http://www.isinet.com/>
- 3) A. Anderson *et al.*, in "Science in Japan," *Science* 258 (1992) p. 561.
- 4) 伊藤光男、「世界の歴史に無い研究機構に発展」、*文部科学教育通信* Vol. 1, No. 3, 20 (2000).

物理と化学の5研究所を跨ぐ “旧・新プログラム：科学研究費補助金（学術創成研究費）” 「新しい研究ネットワークによる電子相関係の研究 物理と化学の真の融合を目指して」がスタート！

電子構造研究系基礎電子化学研究部門 西 信之

茅所長のリーダーシップによって、高エネルギー加速器研究機構・物質構造科学研究所、東北大学金属材料研究所、東京大学物性研究所、京都大学化学研究所、そして分子科学研究所という物理と化学の5研究所が一体となって、研究ネットワークを構築し、物性物理学と物性化学の境界領域としての「多様な電子相関係物質科学研究」をスタートさせることとなった。5年間に10億円のプロジェクトであるが、その予算の主要部分は、物質構造科学研究所（物構研）を中心とする、コラボラトリーの構築に充てられる。これは、中性子やX線を用いた高精度の構造解析を各研究所からのリモートコントロールで行えないかという発想から始まった。また、ヒューマンインターフェースとして、5研究所にいるメンバー間で多対多間のリアルタイムの研究討論を行うためのネットワークの構築も目玉の一つである。このような新しい設備を中核として、我が国の物質科学の研究所が一体となってこのようなプロジェクトを遂行する意義は極めて大きい。

分子科学研究所では、点検評価を踏まえて将来構想委員会を中心として議論がなされ、物質関連の研究施設や研究部門の強化を図るためにE地区にその拠点を構築するという構想を持っている。これは、従来の物性化学の枠を越え、物質科学がこれから迎えるであろう新しい発展に対応したものでなくてはならない。錯体化学実験施設や関連領域研究系を包含した広い視野に立った物質科学の拠点形成と目指した展開は、研究所の主要な課題の一つである。物質

科学の発展は社会的にも大きな期待を寄せられており、分子科学研究所が様々な方策によって積極的に取り組む必要がある。このような時の中にあって、5研究所の研究プロジェクトがスタートできたのは、この流れを加速する大きな力となるであろう。リーダー構想案に記されたその内容を以下に紹介する。

物性物理学と物性化学が「実空間であれ運動量空間であれ、各々の旧来のやり方では表現できない電子系」を未開拓領域としてもっており、精密化と専門化が進んだ2つの物性科学が、各々の個性を尊重しつつ、共通のターゲット持って協力・融合して、次世代の物質科学の基礎を支える新概念を構築することは緊急かつ極めて重要である。この目的を遂行するために物質科学研究に携わる研究・教育機関が緊密な連携関係を構築することが望まれる。将来的には、仮称「物質科学研究機構」のような大学・研究所をつなぐ組織の構築が適切と考えられるが、その大きな目標に向かっての第一歩としてわが国の物性科学に関連する五つの研究所（東北大学金属材料研究所、東京大学物性研究所、高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所、岡崎国立共同研究機構分子科学研究所、京都大学化学研究所）の分野を超えた協同体制を築く。この共同体制を真に実現するためには、現代IT技術の革命的発展に基づいた研究室間ネットワーク“コラボラトリー”の構築が不可欠である。新しい研究協力システムである“コラボラトリー”とは、各研究室の持つ資源（ブレイ



ン、ハードウェア、ソフトウェア)を研究ネットワーク上の研究室の間で共有化することにより、各研究室があたかも隣にあるかのような研究環境を提供するものである。その内容は、A：特殊大型装置の遠隔操作による共有化、B：高速ネットワークによる分散並列計算機システムの構築、C：多対多のヒューマンインターフェースシステムの構築、の3つからなる。

本研究では、以下のような役割をもつ五つの研究班を構成する。(1班)強相関物質班：新奇な物性を持つ多機能強相関電子系の創製を行う。(2班)複合ナノ構造物質班：ナノサイズ分子系および界面ナノ構造物質の創製、構造解析および機能制御を行う。(3班)構造・物性解析ネットワーク班：特殊大型実験装置の遠隔操作による研究室の枠を超えた物性評価システムを構築する。(4班)計算機ネットワーク構築班：各研究所のスーパーコンピューターの並列使用による巨大分散並列計算機の構築とそれによる強電子相関物質の機能設計を行う。(5班)ヒューマンインターフェース(HI)構築班：多対多の研究者間のネットワークによる緊密な協力体制を構築する。これら5班の班内、班間における物理と化学の融合、そしてコンピューターネットワークによる研究所の枠を超えた柔軟な新研究協力システム“コラボラトリー”の構築により、物性科学の新しい潮流を構築することが本研究の最大の目的である。

分子科学研究所からは、第1班に小林速男教授、田中晃二教授、筆者、井上克也助教授が、第2班に、

畠田博一助教授、佃達哉助教授が、第3班に、小林速男教授が兼務で、また、第4班と第5班に青柳睦助教授がメンバーとして参加している。また、分子研が事務を全面的に引き受けており、事務局秘書として鈴木優子さんが専念される。

大豆生田君のこと

米国自治領プエルトリコ大学博士研究員 池 上 努
(前 理論研究系分子基礎理論第一研究部門助手)

はじめて分子研を訪れたのは、修士二年目の夏のことだから、もう十年近く前になる。琵琶湖での分子科学夏の学校に参加した後、美斎津さんに無理を言って、分子研を見学(見物か?)させてもらった。実験棟をひと渡り案内していただいたあと、西先生のお部屋にお邪魔してお話を伺った。強い感銘を受けたことを憶えている。その日は美斎津さんのアパートに泊めてもらった。結婚される直前のことだったと思う。今、思うに、ずうずうしい奴である。博士課程を分子研でとるシタゴコロもあったのだが、結局、エレベータ式に進学してしまった。ところがその三年後、分子研の、今度は理論系にやってくるのだからアラ不思議。そのまま六年、居座ることになるのだから世の中わからない。

ひと所に六年も暮していると、およそいろんなことが起きる。その中でも特に後味の悪かった思い出を書いておこう。主人公は大豆生田君という。大豆生田君は鳩である。名前はついさっき付けたところだ。彼にはじめて会ったのは、三年前の冬である。その前にも会っているかしのれないが、憶えちゃいない。当時、借りていた下宿は、建物に入っすぐの所が吹き抜けになっていて、高い所に明り取りの窓があった。大豆生田君はその窓の縁に越してきた。越しては来たものの、どうもそこが気に入らぬ様子である。しきりに窓に向かって体当たりしている。「すぐ下に出口がありますよん。」出掛け際にひと声かけてみた。

翌日。部屋を出ると、ばさばさ音が聞こえる。大

豆生田君である。二百三高地もかくやの突撃を繰り返している。不屈の闘魂である。がんばれ、大豆生田君。負けるな、大豆生田君。しかし所詮、鳩はハト。ガラスには傷ひとつ、付いていない。「こけてよるけて落ちてくるかも。」とりあえず放っついて、出掛けてしまう。冷たい奴だ。

鳥は弱ると膨らむというのは本当である。そのまた翌日、大豆生田君は前日比、約 1.2 倍に肥大している。こちらを向いたその姿は、まるでふくらまずめだ。思い出したように繰り返す体当たりにも力がない。二、三本、飛び出した羽も、憔悴感に彩りを沿えている。ことここに至ってようやく対策を考えた。しかし、いい考えが浮かばない。棒の先に籠をくくり付けて突き出してみたけれど、大豆生田君、おたおたと逃げ惑うばかりで、降りてこない。小一時間も振り回したら、目が回ってしまった。放り出して出掛けることにする。飽きっぽい奴だ。

その夜、帰ってきたら、もう動かなくなっていた。冗談の好きな大豆生田君のことである。死んだ振りをしているのかもしれない。だがもう二度と、体当たりをすることはなかった。

今、住んでいる所は鳩が多い。道に伸されて平べったくなっている奴もいる。そんな鳩を見ると、大豆生田君のことを思い出す。思えば間抜けな死に様である。けれども、そんな彼を嗤えない自分がそこにいる。



流動研究部門を去るにあたり

宮崎大学工学部教授 黒澤 宏
(前 極端紫外光科学研究系界面分子科学研究部門教授)

今、考えても不思議な出会いから始まった。東岡崎駅前のレストランで夕食を取っているところに、主幹の宇理須教授が突然現れた。流動部門の教授を探しているが、引き受けてくれる人がいない。「黒澤さん、どう?」と言われても、「えッー?? 流動って、なに??」。それ以来、大学内での合意を取るのに、小規模な地方大学ならではの問題にぶつかりながら、伊藤前所長が学部長へ直接お話くださり、なんとか予定通りに事が運んだことは、今考えれば薄氷を踏む思いの1年間であったかもしれない。お陰で平成11年4月には、分子研での新しい研究生生活をスタートさせることができた。

分子研とのお付き合いは、機器分析センター、極端紫外光実験施設の利用を通じて歴史は古く、いろいろな方々との交友もあったので、見も知らぬ世界に飛び込む気はしなかった。また、施設の方々の暖かい励ましもあり、研究生生活も順調にすべりだし、大学における各種委員会や講義の責務から逃れ、研究三昧の生活は無事にスタートを切った。当人にとっては、突然舞い込んだサバティカルである。で、何をしよう? 折角、神が与えたもうた貴重な時間であるので、無為にすごしたくない。かといって、今までの研究を継続するのも能がない。2年後に戻る大学で、残る10年間に花開かせられるような新しいテーマの足がかりをつかむことをもくろんだ。幸いなことに、NEDOの助成事業による資金もあり、分子研での特別研究費をあわせて、ナノサイズの光物性に焦点を当てた研究に取り組むことにした。とは言っても、すぐに測定に取りかかることは出来ず、装置の設計から製作を始めたに過ぎなかった。

柳田君が、修士課程から博士課程に進学したこともあり、2年間の間に、ほぼ全容の装置が立ち上がり、当初の目標に向かってのスタートが切れたことは、幸いだった。また、この研究テーマとは別に、私が分子研に移る直前に竹添君が学位を取ったので、分子研のポストクに採用していただき、宇理須教授との共同研究として、放射光励起の表面反応装置と観測装置の立ち上げに参加させていただいた。細かい問題が山積みされた研究であり、思うように進まなかったことは、返すがえすも残念であったが、それなりに新しい経験を積むことが出来たことは、竹添君にとっても良かったのではないだろうか。

研究とは別のところで、忘れられないくらい楽しい出来事もあった。それは放射光学会の開催である。若い人たちと、わいわい言いながらの準備作業をおして、親しくなれたことは何事にも代え難い。加えて、放射光関係の研究者の方々ともお近づきになれたことも。講演会が無事にスタートしたことを見届けるやいなや、受付での佐々木泰三先生たちとのワインパーティーも忘れることは出来ないできごとである。遅ればせながら、所内でお手伝いいただいた方々に、この場をかりて感謝したい。

ところで、分子研に来て最高に良かったことは、今までに出会ったことのないような種類の研究者と親しくなれたことであろう。それは茅所長とUVSORの繁政助教授である。茅所長は雲の上のような方であると想像していたのだが、たまたま同じ日に赴任したことからか、当方から見れば、「何で?」と言いたくなるほど、親しくしていただいた。また、繁政助教授には、「研究は楽しまなくっちゃー!」の

言葉を身をもって教えてもらった気がする。常日頃、「研究は趣味」と思って生活してきたのであるが、その通りの人がいたっ！て、感じである。これからもこの言葉通りの生活が出来ればと思っている。最後に、研究所のみなさんの迷惑を顧みず、当方が勝手に親しくしていただいたと思っているのかもしれないが、これからもその思いこみのママに接させてください。どうかよろしく申し上げます。



毎週帰ることじゃ！

福井大学遠赤外領域開発研究センター助教授 福井 一 俊
(前 極端紫外光科学研究系界面分子科学研究部門助教授)

大学の教官室で、まだ開けていないダンボールの山に囲まれながらこの原稿を書き始めました。たかが2年分の簡単な引越したと思っていましたが、いざ収納しようと思うと意外に量が多く、改めてこの2年の重さを感じさせてくれています。

さて、この2年間はUVSORを中心に活動させていただきました。施設ビームラインのBL7Bを担当させていただき、このビームラインの立ち上げの最終部分と整備及びユーザー対応を行いながら、他のビームラインも使わせていただくという放射光三昧の生活でした。

ところで、岡崎には単身赴任致しましたが、単身赴任歴連続20数年という大学のツワモノ教授から、“要は毎週帰ることじゃ”と言われ、まじめにもほぼ実行しました。おかげで、高速バスの常連となり（JRは高い！）他の常連を識別できるようになりました。しかし、彼らの年季を感じさせる乗りこなしは結局マスターできずじまいでしたが（ツワモノの中には、乗車中ずっと何かの資格試験の勉強をされている方がいて感心しました）、腰痛を避けたい私はひたすら寝ることにしました。乗ったらすぐ寝て、トイレ休憩もむやみに起きず、終点まで寝つづけるのが私の極意です。いかなる状況下でも（たとえシートが体に合わなくても）寝つづけることがマイスターへの道なのです。

最後にご負担を承知で流動に送り出してくださった大学関係者の方々、受け入れてくださった分子研の皆様方、そして単身赴任を可能にしてくれた愛する家族に心より感謝いたします。

感謝の2年間

愛媛大学理学部助教授 長岡伸一
(前 極端紫外光科学研究系界面分子科学研究部門助教授)

このたび、3月31日をもちまして大過なく流動期間を終え、4月1日付で前任地の愛媛大学理学部に帰任いたしました。昭和60年から平成元年にかけての4年間に続き、2度目の2年間の在任中は大変お世話になり、誠に有難うございました。お蔭様にて研究においても日常においても充実した日々を送ることができました。

研究面においては、間瀬一彦さん(現在、Photon Factory)や田中慎一郎さん(現在、名古屋大学大学院理学研究科)に教えていただきながら、主としてUVSORのBL2B1ビームラインで電子・イオン同時計数装置を用いて表面上での内殻電子励起によって引き起こされるサイト選択的な解離の研究を行いました。サンプルはSi(100)表面上に吸着した $\text{CF}_3\text{CD}(\text{OH})\text{CH}_3$ で、単層吸着と多層吸着の相違、温度変化などからサイト選択性に付いて興味深い結果を得ることができました。流動期間中に行った東京大学物性研究所の吉信淳先生のグループとの共同研究であるHREELSの結果とまとめて論文にする予定です。また、気相における電子線励起による新しいタイプの電子・イオン同時計数装置を開発中でして、愛媛大学で研究を継続いたしますので、今後ともご指導くださいますよう、どうかよろしく願いいたします。間瀬さんが栄転した後の同時計数装置担当、田中さんが栄転した後のBL2B1のビームライン担当、UVSOR安全委員、分子科学研究所研究会世話人の経験は、大変勉強になり、今後に大いに役に立つと思います。

在任中、技官や事務の皆様のしっかりした研究サポート体制には大いに助けられました。特に、UV

SORの中村永研さんにはビームラインの整備や保守で大変お世話になりました。研究所でのルームメイトである佐々木時代さんをはじめ秘書の方々のサポートで事務処理を円滑に進めることができました。

帰任いたしました愛媛大学は医学部、工学部などの「実学」が主体であり、理学部でさえ学生は純粋に学問的な面白さよりも「研究が何の役に立つか」を大いに気にしていますし、教員免許が取れることが入学の大きな動機の一つになっています。そこから分子科学研究所のような「高等学術研究機関」に来るとまったく異なった雰囲気(真理の探求へのひたむきさ)を感じました。今後、このような雰囲気をそのまま継続すべきなのか、それとも時代とともに変質していくべきなのか現在問われていると思います。個人的には、年齢的なものから、そうした研究所の雰囲気に郷愁を覚えますが、今後の皆様の判断が益々重要な意味を持ってきていると思います。

最後になりましたが、2年間大変お世話になった伊藤光男前機構長をはじめ岡崎国立共同研究機構の皆様、茅幸二所長をはじめ分子科学研究所の皆様、特に宇理須恆雄主幹をはじめ極端紫外光科学研究系の皆様と小杉信博施設長をはじめUVSORの皆様、留守中お世話になった愛媛大学理学部物質理学科化学系の皆様に心から感謝いたしますとともに、皆様のご健康と分子科学研究所の益々のご発展をお祈りいたしまして、お別れの言葉に代えさせていただきます。有難うございました。



Getting Acquainted With IMS

Heiko Hocke

My name is Heiko Hocke. I am a JSPS postdoctoral fellow and currently a member in the group of Professor Yasuhiro Uozumi/ Coordination Chemistry. I arrived in Japan nine months ago. Herein I want to tell about my experience with the Institute for Molecular Science. But in order to tell properly I should start with the very beginning that means before my arrival in Japan.

Previously I had joint as a postdoctoral fellow the group of Prof. B. Giese in Basel/ Switzerland. At this time my work was connected with radicals and peptides. But my research interests moved on to asymmetric catalysis, especially solid supported catalysts. From a labor mate in Basel I heard about the work of Prof. Uozumi — and shortly after that a contact was established. He invited me to join his group as a postdoc giving me the opportunity to gain experience in this field of — after all — black box chemistry.

After approval of my fellowship by JSPS I learned that I need a visa for my period of stay in Japan. This is normally a very time consuming process (about 3 months) unless someone has a so called ‘Certificate of Eligibility.’ I wrote my ‘problem’ to Mrs. Aimi Nishimura (secretary of the group) and got promptly not only the certificate, but also a lot of written confirmations for every thinkable reason and question. The Japanese Embassy in Switzerland issued the visa then in two days.

Mrs. Nishimura also informed me by e-mail that the IMS is able to provide accommodation for foreign

visitors. She was so kind to arrange everything. In fact, when I arrived in Japan, all necessary things had been settled already and I had not to look after anything at all. In the first week Mrs. Hisayo Nagasono (secretary for foreign affairs) took me to all the government offices doing the unavoidable bureaucracy. Maybe this is Japanese style but I was really surprised about the good organization and unconventional handling. I am very thankful to both Mrs. A. Nishimura and Mrs. H. Nagasono for making my start in Japan so easy and I want to use the chance to say thank you to both of them.

I think this example from my starting time at the institute shows not only how well experienced the IMS administration and staff are with the needs and problems of a new arrived ‘gai koku jin’ but also how efficiently things are handled.

Since my beginning I found the atmosphere at the IMS is both stimulating and encouraging. One reason is surely the state of the art equipment available, which makes research very enjoyable, but more important are the people working here. I experience much support, which I need the most in subjects related to information of any kind, since I am not able to understand or read Japanese, from my coworkers. Particularly, I have to thank my host, Prof. Y. Uozumi, and all the members of his group for the hearty and warmly welcome as well as for their constant voluntary and gratuitous help.

A complete different aspect of the IMS is its

multicultural environment. People from many different nations (U.S., China, S-Korea, Hungaria, Russia ...) and cultural background are living on the campus-like area in Mishima Lodge or Yamate Lodge creating a unique pot-pourri. It allows a deep and fast inside to strange custom (at least strange to me), religions and world view not as a tourist, but as a neighbor and friend. Especially at the beginning it did profit me in another area of living too, because it was the fastest way to learn about good shopping centers, historical sites for viewing, sport activities, upcoming events in Okazaki and all the small things that make daily live easier and which helped me to integrate in social live.

Besides all this, the kindness and hospitality of many people living in Okazaki, for instance people from the OIA and from the Rotary Club, are a huge help to get adjusted and make me feel almost at home.